

道祖神の起源と目的

この地域にある数多くの道祖神全部についていつ作られたかを知るのは不可能ですが、ほとんどは江戸時代（1603-1867）の後期からと明治時代（1868-1912）の初期にかけて彫られたと考えられています。地元の歴史家は、これらはおそらく各地を巡回していた石彫職人が地元の人々から依頼を受けて神に奉納するために彫った像だとしています。今日でも、石彫職人は特別な機会や場所を記念するために新しい道祖神を彫るよう依頼されることがあります。

道祖神の彫像は通常、単純に「道祖神」の文字を彫ったものか、人間の姿（普通は男女一対）を彫刻で表したもののどちらかです。多くの場合、男女は手をつないでいるか、男神が腕を女神の肩にまわしています。他には、男神の持つ盃に女神が酒を注いでいる様子を描いたものもあります。時には抱擁を交わしているものさえあります。道祖神の画図に子どもたちはめったに現れないものの、これらの像は婚姻と多産の神を具象化したものです。

もとは、巡礼者などの旅人がこれらの道端の神に旅の安全を祈っていました。しかし、この地域の人々は、道祖神を日常的な事柄について助けてくれるものとみなすようになり、道祖神に良縁や子宝、豊作、無病息災を祈るようになりました。これらの簡素な石像は、村全体を災厄から守っていると考えられています。